

し、延喜式にも土呂鍬などいふ名も見えたり、ことに薯蕷は南部など名産あり、

〔料理物語汁〕とろ、汁にぬきよし、山のいも、あをのりよくくこまかにおろしすりて吉のり
はいろよきほど入候て吉、あため過候へばあしく候すい口こせうのこ、

〔鹿苑日記〕慶長八年二月十六日、辰刻柳芳同途シテ赴勝願院、相伴兵衛大夫、木工頭、會席、トロ、煎
昆布アライデ、鹽山升、引テ牛房、フツ煎後又椎茸猪口アエテ引之、酒四片、又後ウ曇肴一兩種、酒四
五盃、喫之恩々トシテ歸院、

〔醒睡笑五〕一とろ、の汁の出たるを、座敷に古人ありて、けふのことつて、汁は、いつにまさり、一入
出来たるなどいひほむる、是はめづらしきことばやと、其子細をとふ、さればよ此汁にてはいか
ほども飯がす、むゆへ、よくいひやるとのえんに、ことづて玄るといふならん、きこえたる作意
やと感じやがてとろ、をと、のへ、客をよぶに、ことづてをとはれ、おたひやるとぞ申ける、
〔醒睡笑六〕一ある座敷にて、兒のとろ、汁の再進をひたもの、うけらる、時三位目をしてにらみ
ければ、ちごのあごにさのみ科はないぞや、たゞとろ、をにらめ、

〔和歌食物本草〕と、ろ汁きをめぐらして食す、めすぎてははらぞふくれこはばる、と、ろ汁
おりくすこし食すれば、脾腎の藥氣虛を、ぎなふ、

〔料理談合集〕汁の部加減の事

ぬかみそ汁、極ふるきぬかみそをすりだしにてのべ、煮上でこしどぶをさしあんばいする也、
〔醒睡笑八〕一山寺に入いたりて、さてもくおもしろき境地や候、大略八景も候はんと申ければ、
住持の返答に、當寺は十景の古所也と、さ候へば、秦の始皇の地にもまさりたり、八景の外には、い
づれを用られ候ぞ、されば旦那あり麓にくだり齋をたべて、こざけにも酔てかへればくはつけ
いあり、さもなく唯二時糟糠汁の風情なれば、ことにひんけいあるかな、